胎内記憶から見える、親子の絆

池川クリニック

池川明

**はじめに**

　「胎内記憶」は最近のマタニティー雑誌のアンケート調査では出産する方の約７割の方が知っているとの報告が出ています。まだ定義も決まっていないいわゆる造語ですが、文部省科学研究費補助金研究成果報告書（1992-1993）の中に「新生児の胎内記憶に基づく学習可能性と母子関係形成メカニズムの研究」が掲載されており、公的研究の中に「胎内記憶」という用語が用いられていることに驚かされます。

　胎内記憶はまだ正式に認められている用語ではありませんので、定義も曖昧です。すでに胎内やその周辺に関する書物は数多く出されてきていて、それぞれの書物を読むと独自の表現を用いて記述がなされています。

　胎内の記憶は「胎内記憶」、生まれてきたときの記憶は「誕生記憶」もしくは「出生（時）記憶」などと言われることが多いようです。また、胎内記憶と誕生の記憶を分けることができない連続した記憶として区別せずに表現する場合も数多く見受けられます。最初に科学的記述として「誕生記憶」について書かれたデーヴィッド チェンバレン博士の「誕生を記憶する子どもたち」（春秋社）は誕生する時点の記憶を扱っているように感じられますが、実際は胎内における記憶に関する記述も多く明確に区別をして表現はしていません。現時点では、胎内記憶は子ども達が語る、胎内から産まれるまでの一連のファンタジーな話し、という意味合いで捉えている人が多いと思われます。

**なぜ、今、胎内記憶なのか？**

　皆様は、医療現場にどのようなイメージをお持ちでしょうか。今産婦人科の世界は産科領域を希望する学生が激減し、ただでさえ希望者が少ない産婦人科医となったとしても、産科ではなく不妊治療、癌治療に活路を見いだす傾向が強くなっています。産科医からみると、過重労働や仕事の負担感が強く、しかも何かあればすぐ訴訟、さらには刑事告発までされるという時代になって、かつてないほどやりがいのない職場になってきています。また、病院－診療所間、勤務医－開業医間、産科医－小児科医間の連携の悪さ、お互いの理解のなさは以前からもありましたが、現場の余裕が無くなるに従って対立関係がむしろ悪化しているようにも思えます。

　そのような劣悪な産科医療の現場にあって、個人的な立場ではありますが、出産に関われることは単純に楽しいと感じています。なぜこのように産科が追いつめられている中で楽しいと感じることが出来るのか、不思議に思われる方も多いと思います。その理由が「胎内記憶」にあるのです。

　医学教育では、自然科学の一領域としての医学をならいます。そこには唯物論思想が根底にながれており、またデカルト主義が発展した人間機械論にみられるように超自然的な力の介在を否定して発展してきました。従って魂の存在、霊魂の存在を否定する上で現在の医療は成り立っているといっても過言ではありません。ところが、現実社会の中ではあまりにも複雑な要素が絡み合って一つの事象が起こるため、複雑系などの学問も出てきています。しかし医療に関しては、病気の原因や発症に関して非常に個人的な背景が絡んでいるにも関わらず、旧来の機械論的な延長におけるエビデンスに基づく医療のみが正しいと信じられているので、現実に起きていることを上手く説明できないことが数多くあります。そのことにより、患者として希望した医療に対する期待と違う結果となった場合、医療行為の実施主体である、医療関係者を訴えるなどが頻繁に起こるのだとも考えられます。

また、さらに医学教育の中では患者の感情に同化すると的確な判断を誤るので、一線を引くように教えています。これらの要素が絡み合うと、患者にとってみると「冷たい」とか「事務的だ」ととられるような医師や看護師・助産師の説明、態度につながってしまうのではないでしょうか。

　例えば障害を持って生まれた赤ちゃんを目の前にして、皆様はどのように考えるでしょうか？妊娠初期で発見できなかったのは医療のミスだ（見つけることが出来たら早期に中絶を勧めることができたのに）とか、ミスではなく防げなかったどうしようもないことだといったような、障害を持つことはいけないことだ、ということが前提で、思考していないでしょうか？

　ところが、胎内記憶では子ども達が「障害は自分の選択で持って生まれてくる」と言うのです。なかには障害を持って生まれることが「幸せになるため」と言ったり「治すのが面白いから」と積極的に自ら障害のある人生を選んだと言う子ども達が少なからずいるのです。この子ども達の証言は、今の医療では「あり得ないこと」と否定されます。なぜなら魂の世界を否定して私たちの医療が成り立っているから、それを認めることは現代の医療を否定することと同じだからです。ですから実証科学であるはずの医療が、この子ども達の証言に関しては、検証もせずに否定するという非科学的な態度をとり続ける自己矛盾の理由の一つはそこにあります。

　私は、子ども達の証言を受け入れて、全ての事象は意味がある、というように捉えることができました。そして、流産・死産・中絶などの赤ちゃんたちの命が関わる現象は、その家族、関わりを持つ医療者など、全員に深い意味がある事を信じることが出来るようになりました。それ故、生きてうまれてこようとしている魂の力強さを信じることもできますし、命をかけて母親のお腹にやってきたことを信じることが出来ます。そして、その命をかけた理由を家族の人と考えるようになりました。すると、亡くなった子ども達からたくさんのメッセージをもらうことが出来たのです。そのメッセージは私たちが一方的に可哀想だ、と考える内容とは全く異なる前向きのものが圧倒的に多いのです。家族の方も子ども達からのメッセージを受け入れることで、悲しみを乗り越え前に進むことができやすくなりました。そのような医療現場に、医療提供側も患者側も元気が出るメッセージを「胎内記憶」を知ることでもらえる可能性が出てきたのです。

**胎内記憶の定義**

「胎内記憶」という用語の定義はまだありません。しかし胎内記憶、誕生記憶、出生前記憶など、色々な用語が用いられています。今まで子ども達や両親たちから聞き取りした胎内記憶の内容を分類すると、陣痛が開始して誕生直後までの胎児・新生児の記憶「誕生記憶」、受精（受胎）の瞬間の記憶「受精（受胎）記憶」、受精から誕生直前の陣痛開始までの胎児の記憶「（狭い意味での）胎内記憶」、過去に別の人として生きていた記憶「前世記憶」、前世と受精までの間の記憶「中間生記憶」、従来はあり得ないとされていた乳児期の記憶「乳児記憶」などがあります。さらに受精記憶には精子と卵子のそれぞれの記憶も表出することから、それぞれ精子記憶と卵子記憶もあると考えられます。

一般でいわれている子ども達が語る胎内記憶は、これらの全ての記憶が混在していて、厳密に区別することはできません。通常「胎内記憶」というと広義の意味で、いろいろな記憶が含まれるということを知っておいていただきたいと思います。従って筆者が「胎内記憶」と使うときにはいろいろな時期の記憶の総称として使っていることが多く、特に厳密にそれぞれを区別する必要がある場合を除いて、この用語を用いています。

「胎内記憶」の分類（表１）

|  |
| --- |
| 1. 新生児・乳児記憶　　　　　　新生児から乳児期にかけての記憶
 |
| 1. 誕生記憶（出生時記憶）　 誕生（出生）時の記憶
 |
| 1. 胎内記憶　　　　　　　　 胎芽から誕生の直前までの記憶
 |
| 1. 受精（受胎）記憶　　　　 受精（受胎）時の記憶
 |
| 1. 精子記憶　　　　　　　　　　精子としての記憶
 |
| 1. 卵子記憶 　　 卵子としての記憶
 |
| 1. 中間生記憶　　　　　　　　　前世の終了時から受精までの記憶
 |
| 1. 前世記憶　　　　　　　　　　過去に別の人として生きていた記憶
 |

**書物における胎内記憶**

　胎内の記憶があることは音の研究ですでに確認されています。妊娠中に聞いていた音に生まれた後反応する、ということは、ヒトだけでなくチンパンジーでも研究でも証明されています。しかし、胎内で思考や感情があるかどうか、という研究は方法論がないだけに研究することに困難が伴います。

　誕生を記憶している有名な事例が、三島由紀夫氏の「仮面の告白」の冒頭に出てきます。

「私には一箇所だけありありと自分の目で見たとしか思われないところがあった。産湯を使われた盥のふちのところである。下ろしたての爽やかな木肌の盥で、内がわから見ていると、ふちのところにほんのりと光がさしていた。そのところだけ木肌がまばゆく、黄金でできているようにみえた。」さらにその文章に引き続き「そのようなことをいう子どもを大人は憎しみの色をこめた眼で見て否定してかかる。いわく、こどもはそのようなことはわからないはずだ、目が見えないはずだ」。胎内記憶に関しては、まさに三島由紀夫氏自信が書かれているとおり、子どもには明確な記憶であるにもかかわらず、大人が「常識」で考えて否定する、という事象であったようであります。しかし、これは三島氏だけに起きたことではなく、今まで多くの子ども達が経験していたことでもあります。

　胎内記憶と思われる記述は以前から書物の中に散見されます。日本で最も古いと思われる記述は江戸時代後期の国学者・神道家である平田篤胤が1822年（文政5年）に刊行した「勝五郎再生記聞」であると思われます。多摩郡中野村の百姓源蔵の次男として生まれましたが、自分は多摩郡程窪村の百姓久兵衛の息子の勝蔵の生まれ変わりであると言っていた勝五郎を自宅に引き取り、聞き取った内容で構成されています。ところが生まれ変わりだけでなく、「腹内にて母の苦しからむと思ふ事のある時は、側のかたによりて居たる事のありしは覚えたり」と胎内での様子の記述も書かれています。門外不出とされていましたが、今では誰でも読むことが出来ます。

　その他、自らの胎内記憶を書いている本として、真名井拓美著「胎児の記憶」、美鈴著「あの世のひみつ」（徳間書店）、畑田天眞如著「命をつなぐ」（桃青社）などがあります。また歌手として有名なイルカさんは「鈴の音」という歌の中で、空を飛びながら自分の両親を捜していた、とご自身が昔から繰り返し見る夢の内容を詠み上げていますが、これも胎内記憶の一つである中間生記憶であろうと思われます。最近では、歌舞伎俳優の海老蔵さんがテレビで「歌舞伎俳優になるために親を選んできた」という話をしていたり、水谷ゆうさんという11歳のシンガーソングライターが「いっぱい大すき」という究極の親孝行ソングといわれる歌で、空の上から親を選んできた事を歌い上げ、ヒットしています。水谷さんはご自身に胎内記憶がある、とテレビで明言しておられました。さらに書籍化されていない記述は新聞や雑誌の中にも散見されます。また、退行催眠という手法で胎内や幼少期の記憶を思い出すことにより生きにくさを解消する方法がありますが、これらの内容を記述した本はデーヴィッド・チェンバレン博士著「誕生を記憶する子ども達」（春秋社）をはじめとして、数多くの書籍が出版されています。

**胎内記憶の調査**

　従来胎内記憶は３－４歳で無くなるといわれていました。本当に従来言われているとおりなのか、とても興味がありました。そして、色々な場所で協力をいただきながら、年代別の記憶保有率が出せました。

**就学前の記憶**

　最近、インターネットで胎内記憶の調査をしていただくことができました。

　調べていただいたのは携帯サイト『ママニティ』で、調査回答数528　調査日2008年２月12日～５月19日にサイトにアクセスし回答してくださったからのデータを表２お示しいたします。

お答えいただいた５３８人の方の結果　（表２）

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| 胎内記憶がある | 373 | 69.3% |
| 胎内記憶はない | 59 | 11.0% |
| 答えたがらない | 53 | 9.9% |
| 未回答 | 53 | 9.9% |

　私が以前調べた調査では３２．９％の記憶保有率だったので、それに比べるとかなり高い率になります。これは母集団が胎内記憶に意識が高い人たちがアクセスしたことが原因で高い率になったのではないかと思います。

**小学校生の記憶**

　小学生についてはある小学校が協力してくださり、２９６名のアンケートをとれました。就学後に記憶を持っているのは２１名　７．１％でした。個人的に調べた範囲で３２人（小学校２年）のクラスと３３人（小学校１年）のクラスではそれぞれ３名の生徒さんに記憶があったため約９％に記憶があったため、小学生では７－９％くらいに記憶があると考えられます。

**中学生・高校生の記憶**

　中学校は７校から講演依頼があり、その時にアンケートで生徒さんからデータを集めています。１－５％の幅はありますが、記憶があるようです。平成21年には県立希望ヶ丘高校の生徒さんが自分たちの出身した中学校で調査をして、15校1110名の調査から、中学生で胎内記憶を持つ生徒さんは28人　２．６％にあると報告しています。

**成人の記憶の率**

　塩尻市のアンケート調査の時に調べました。１３９９名の方が回答を寄せ、そのうち６名（胎内記憶　３名、誕生記憶　５名、そのうち両方の記憶を有しているもの　２名）で１．１％の人は成人になっても記憶を持っていることがわかりました。倉敷市立短期大学保育学科の奥富庸一先生の研究では、大人で0.6%記憶を保持していると報告しています。

　以上より、成人になっても記憶を持っている人はいますし、小学生から高校生にかけてもかなりの率で記憶があると考えられます。ただ、年齢とともに記憶を保有する人は減少していくようです。

**胎内記憶が育児に影響を与える点**

　母親のストレスは胎盤ホルモンや酸化ストレスを介して、エピジェネティック的に次世代の遺伝子に影響を与え、行動異常、神経発達の異常などを引き起こし、さらに数世代その影響を残すことが動物実験で知られています。まだヒトでの証明はされていませんが、動物で異常が出るということはヒトにも影響があると考えることもできるのではないでしょうか。

　しかし母親のストレスの緩和する方法が、なかなかありません。疫学では知識はあっても行動変容に結びつかないことが悩みの種、といわれています。多くの人は周囲の状況を変えなければならない、と考えますが、その状況を変えることはかなり難しいと考えられます。しかし、たとえその状況が変わらないとしても、その状況の「認識」を変えることでストレスが緩和することが可能です。母親がストレスな状況下にあるとしても、胎児に意識が向くことで気持ちが変わると、ストレスが大幅に軽減されます。それにより穏やかな出産育児を迎える人が増えていることは現場で実感できます。

　胎内記憶の内容から、胎児は胎内から五感があり記憶もあり、母親の行動・発言を覚えているということや、母親を助けるためにやってきたという子どもがいる事を知るだけで、行動変容が起きる可能性が高いのです。その結果として子どもの行動発達、神経発達にネガティブな影響を与えずにすみ、社会的適応能力の高い子どもたちになるのであれば、胎内記憶は実学として意味のある領域であると考えます。